フランス社会学の誕生とエミール・デュルケーム ―ユダヤの実証科学の視点を踏まえて―

The Birth of French Sociology and Emile Durkheim －In the light of Jewish Positive Science Perspectives－

平 田 文 子*
HIRATA Fumiko

はじめに

社会学という学問は「社会に関する単なる思索ではない。社会学が一個の科学である以上、それは、体系化された知識でなければならない」[1]と田辺寿利は著書『フランス社会学成立史』で述べている。社会学sociologie（仏語）という言葉を最初に作ったのはフランスのオーギュスト・コント（Isidore Auguste Marie François Xavier Comte, 1798-1857）である。用語としての「社会学」の誕生はコントに出発点を見るとしても、その学問の萌芽はそれ以前から芽生えていた。田辺によれば、コント以前の重要な社会理論提唱者としてパスカル、モンテスキュー、ラ・メトリ、ビュフォン、コンディヤックなどを挙げている[2]。田辺によると、「コントによって組織化された社会学理論は、決して、彼一人の天才と努力とにのみ依存するのではない」[3]として上述した社会理論提唱者の理論を分析し科学的方法の萌芽を拾い上げ、あるいは、実証科学としての不足を指摘している。田辺が述べているようにコント及び、それ以前の研究者たちの活躍があったことは言うまでもない。しかし、フランスの社会学を名実ともに学問として誕生させたのはエミール・デュルケーム（Émile Durkheim, 1858-1917）である。そして、デュルケーム自身は、コントよりもサン・シモンをもって社会学の起点であると主張している[4]。また、フランス及びヨーロッパに社会学が誕生したことには宗教対立から登場したプロテスタンティズムが関与していることも確かである。つまり、プロテスタンティズムの組織が16世紀における実証科学の確立に貢献しているとデュルケームは述べている[5]。エミール・デュルケームが社会学を「体系化された知識」として成立させたことは『社会学年報』（L'Année sociologique, 1898（1896-1897））の雑誌の発行をもって認められている。また、筆者としてはデュルケームの実証科学の知見には、ユダヤ教タルムード学の実証科学の視点が含まれていると考えている。

1．ユダイズムの実証科学と「経験科学性」（positivisme）

唯物論・唯心論という観念がいつから始まったかということについて、フォイエルバッハは、プラトンが最初の物心二元論者であると述べている[6]。古代ギリシアの時代から既に肉体（物質）よりも心の優位がプラトンにより謳われていた[7]。死の恐怖から生まれたとされるこのような唯心思想は、ヨーロッ

＊　埼玉工業大学人間社会学部情報社会学科

パにおいて長く受け継がれてきた。しかし、このような物心二元論を有するヘレニズム思想に対峙して全く逆の発想も誕生した。イスラエルの民（ユダヤ教・ユダイズム）の思想である。ユダヤ教タルムード研究者の市川裕によると、「ユダヤ教を意味するユダイズム（Judaism）という言葉の起源はギリシア語の「ユダイモス」で、「ヘレニモス」への対抗概念として生み出された」[8]と言う。

そして、キリスト教とともに発展した西洋思想はヘレニズム（ギリシア思想）とヘブライズムの二つの源流を持つとされる。しかし、ユダヤ教は、キリスト教徒からの長い迫害やゲットーにより、キリスト教とは異なる独自の伝統を維持、発展させてきた。しかも、ユダヤ教（ユダイズム）はキリスト教とは異なり、ヘレニズムの思想を受け入れなかった。彼らは目に見えないものを論じる知性は人間の知性を超えたものであると考え、それは専ら神の領域と考えたのである。

稲村秀一は次のように述べる。

> ヘレニズムの人間観では、一般論ではあるが、魂と身体の二元論が基本的構造であり、魂と身体の関係、および魂の構造・動き・能力などが探求される。各哲学者によって、その問題の理解の方法は相違していても、二元論という構造は変わらない。これに対して、ヘブライズムでは、人間論は魂と身体の関係論となる前に、魂と身体の統一体である「私」（実存）が創造主たる神（永遠の汝たる神）の前でいかに在るか、という問いとして考えられている[9]。

「魂と身体の統一体である「私」（実存）が創造主たる神の前でいかに在るか、という問い」がユダイズムの学問探求の中心的課題であることがここに示されている。ヒトが「どうあるか」、「どうあるべきか」を、探求することを常に議論してきたユダヤ教の賢者にとっては、目に見えない魂や死後の世界が「どうあるか」は、議論の的にはなりにくかった。それ故に議論は、常に、「目に見える『行為』としてどう動くか」に集約されていく。デュルケームの実証科学の特徴の一つである「経験科学性」はここに源泉を持つとするのが筆者の考えである。

デュルケームの1895年の著書 *Les regres de la methode sociologique* の邦訳者で知られる菊谷和宏は以下のように述べている。

> デュルケームが、社会学を学問として確立するためにその経験科学性（実証性）の確保に大きな努力を払ったことはよく知られている。彼にとって、その努力は、コントやスペンサーの「実証主義的形而上学」（Durkheim, 1937, ix）[10]と彼の考える社会学との区別を確立するための努力として、特に彼の学問生活の初期において社会学的認識に関する諸議論として行われた（(　) 内は原著のまま）[11]。

菊谷和宏の述べるところの「社会学を学問として確立するためにその経験科学性（実証性）の確保に大きな努力を払った」、この「経験科学性」（positivisme）はタルムード研究の実証科学性に源泉を持つのではないかと筆者は考える。実際、イエシヴァ大学の心理学者エドワード・ホフマン（Edward Hoffman）[12]によると、彼が実践している心理学療法のPositive Psychologyは、その心理学療法の歴史上の主要人物として、中世の著名なラビのマイモニデスデスを取り上げている[13]。周知の通り、positive

の邦訳としては「実証的」という言葉が、positivismeの邦訳としては「実証主義」という言葉がよく使われる。しかし、菊谷がこの論文では「経験科学性」と邦訳しているのには彼自身が脚注で示しているように、現代哲学における実証主義と混同されないためであり、デュルケーム自身の言葉の文脈を捉えているからである。デュルケーム自身はpositivismeについて次のように述べている。

事実、われわれの主な目的は、科学的合理主義を人間の行為にまで拡張することにある。それも、人間の行為を過去に遡って考察し、人間の行為が、〔他の諸科学の領域に〕劣らぬ合理的な操作で未来のための行為規準へと後に転換されうるような因果関係に還元されうることを示すことによって。われわれの実証主義（経験科学性）（positivisme）と呼ばれるものは、この合理主義の一帰結にすぎない。事実を説明するためであれ、あるいは事実を制御するためであれ、その事実が不合理だと感じられてこそ、人は事実の奥に進むように誘われる。もし事実が全面的に知的に理解可能であれば、科学をも実践をも満足させる。なぜ科学をかといえば、その時には当の事実の外部にその存在理由を探求する理由がなくなるからである。なぜ実践をかといえば、事実の利用価値がその存在理由の一つになるからである。したがって、とりわけ神秘主義が甦りつつある昨今、このような試みは、多少の見解の相違はあれども、理性の将来に対する我々の信頼を分かちもつすべての者によって、懸念なく、共感さえもって受け入れられうるし、またそうでなければならないように思われるのだ[14]（〔　〕内は菊谷の邦訳書に準拠、（経験科学性）引用者加筆）。

なおかつ、デュルケームは、この引用文中のpositivismeを含む一文の末尾に脚注を付けて「ゆえに、コントやスペンサーの実証主義的形而上学と混同してはならない」と念押ししている。また、「神秘主義が甦りつつある昨今」と言及し、論拠の不確かな言説によって実証科学の領域が侵されることへの警告を述べている。

一般的に考えても、二元論を基本的な立場とするとしないのとでは学問の取り扱う範疇も方法も大きく異なってくる。目に見えない魂を論じること（唯心論の立場）で実証科学を主張できるかというと限界があるだろう。それ故に実証科学を唱える立場の研究者は唯物論を基本的な立場としていることには異論がないと思う。また、唯物論とは異なる経歴を有するユダイズムにおいては、人間の行動の科学としての律法解釈の学問が存在していた。それが、民族離散の歴史を持ちながらも離散した民族を強力なネットワークによって結び付けるために維持発展させてきた「法（おきて）」の実証科学であり、更に、長い人間の歴史の中で研究されてきた実践的場面における人間的行為の教育を重視する経験科学である。そして、これが、コントの「実証主義的形而上学」とは異なる、より社会の実在に即した近代的な社会学を確立するためのデュルケーム社会学の切り札となったと考えられる。

菊谷は、「デュルケームは、「社会的事実の観察に関する諸規準」と題された『規準』[15]第二章の冒頭において、第一章において定義された社会的事実の定義を基に、あの非常に有名な規準を宣言する。即ち、「第一のそして最も基本的な規準は、社会的事実を物のように考察すること（considerer les faits sociaux comme des choses）である」（Durkheim,1937, 15）（強調原著者）」[16]と述べ、更に社会を物のように考察することについて次のように解説している。

まず、この規準にいう「物（chose）」について、デュルケームは次のように説明している。「実際、物とは、観察に与えられるものすべて、観察に供される、というよりはむしろ観察に強制されるものすべてである」（Durkheim, 1937, 27）（強調引用者）と。そして続けてこう述べる。「現象を物のように取り扱うこと、それは、科学の出発点をなす資料（data）としてそれらを取り扱うことにほかならない」（Durkheim, 1937, 27）（強調原著者）。そしてこの場合の資料とは、社会現象についての諸観念ではなく、まさに社会的実在そのものでなければならないとされる。さもないと、自ら批判した「実証主義的形而上学」の轍を踏んでしまう。それを避けるために、デュルケームは更に主張する。「社会諸現象は、それらを表象する意識的主体から切り離して、それ自体として考察されなければならない。即ち、外在する事物として、外部から研究されねばならない。なぜなら、それらが我々に対して現れるのは、そのような性質においてであるからである」（Durkheim, 1937, 28）（強調引用者）。

先と同様に、ここでも一つのことを確認しておこう。それは、以上の『規準』第二章における考察では、デュルケームは、一貫して先の意味での「客観的観察者」の視点に立っており、第一章におけるような「社会内的行為者」の視点には立っていない[17]。

菊谷は、デュルケームの資料（data）の考察の方法について（つまり、「社会的事実を物のように考察する」ことについて）、一つの問題を提起している。それは、「社会的観察者」（社会外部からの客観的な視点）と「社会内行為者」（社会の構成員としての視点）が安易に混同されていることへの疑問である。菊谷は以下のように指摘する。

今一つ指摘しておくべきことは、デュルケームの議論の視点の問題である。既に確認したように、デュルケームは、社会的事実の規定の次元では「社会内的行為者」の視点で議論を展開し、その議論を根拠として、続く社会的事実の観察の次元の議論を、今度は「客観的観察者」の視点から展開する。そして、そのような視点の変更を行っているという自覚はまったく見られない。つまり、この時点のデュルケームには、この二つの視点から見た社会的事実は― それが「客観的な」ものなのだから―一致するということが、論証の必要もない当然のこととして考えられていたのである[18]。

菊谷のこの重要な指摘は、私見によれば、デュルケームがフランス社会に居ながらもユダヤ教徒コミュニティーの一員としての生活経験を体験していたことを示している。つまり、フランスを一つの社会として外部から観察しうる立場を持っていたことをうかがわせるものである。それは、デュルケームの祖父の時代にユダヤ教徒を市民として認める「ユダヤ教徒解放政策」が行われながらも、ユダヤ教徒を部外者として認識してきたフランス社会の現象であり、この現象は、資料によって実証可能な事例として数多く残されている[19]フランス社会の特徴でもある。ラビの職を代々受け継いできたデュルケーム一家が抱えてきた社会的事象そのものでもある。ラビにとって、父祖伝来の「法」の解釈をその場その時の社会状況に合わせて変更していくことが任務であった。不用意な変更は許されず、道徳的感情と道徳的観念に強く拘束された「一定の精神的態度」[20]をもってその任務を遂行することが定められていた[21]。この「一定の精神的態度」（ある種の精神的態度）というデュルケームの言葉は先の菊谷の引用文のすぐ次に出てくる言葉である。

菊谷は、この論文の後半において、デュルケームの1898年の論文「個人主義と知識人」[22]を取り上げて、「社会内的行為者」の視点と「客観的観察者」の視点との乖離が発生しているとしてデュルケームの認識論的葛藤が深化していることを指摘している[23]。菊谷の同論文の後半部分の展開は迫力がある。しかしここでは割愛してユダイズムの学問体験の紹介に進みたいと思う。

２．ユダイズムの学問体系

本稿ではJudaism（仏語：Judaïsme、独語：Judentum）の訳語として「ユダヤ教」ではなく「ユダイズム」を使用する。宗教としてのユダヤ教＝Judaismの中でも特に学問・研究領域に焦点を当てるからである。古代ギリシアの「ヘレニモス」の対語としての「ユダイモス」を起点とするJudaismと考えていただきたい。

イマニュエル・ヴォルフ（Immanuel Wolf, 1799–1847）は、著書『ユダヤ学の概念について』（*Ueber den Begriff einer Wissenschaft des Judenthums*, 1823）の中で次のように述べている。19世紀初頭のこの著作は、当時ドイツで起こったユダヤ教の学際的な研究、ユダヤ学（Wissenschaft des Judenthums）[24]について述べているものである。

> ここで紹介するユダイズムは、それ自身の内在的な原理に基づき、一方では広範な文献に、他方では多くの人々の特定の生活と活動に具体化された全体として、科学的に扱うことが可能であり、またそうしなければならない。（中略）もしユダイズムそのもの、そしてそれが含むすべてを科学の対象とし、ユダヤ学を確立しようとするのであれば、私たちは非常に異なった処理方法について話していることは言うまでもない。しかし、どのような種類のものであれ、その性質上、人間の精神に関心を持ち、その多様な構成と展開の中に豊かな内容を持つものは、特別な科学の対象となりうる。そして、この特別な科学の内容は、その対象をその全範囲にわたって体系的に発展させ、表現することであり、それは別の目的のためではなく、それ自身のために行われるのである。これをユダヤ学に当てはめると、次のようになる。
>
> １）ユダヤ学は、ユダイズムをそれ自身の取り巻く環境において理解するものである。
>
> ２）ユダイズムをその概念に従って展開し、個々の特徴を常に全体の基本原理に関連づけながら、体系的に提示する。
>
> ３）対象を余計な目的や特定の目論見のためではなく、それ自身のために扱う。先入観を持たずに扱い最終的な結果にはこだわらない。その目的は、一般的な意見に対して対象を有利にしたり不利にしたりすることではなく、対象をありのままに見せることである。科学はそれ自体で十分であり、人間の精神にとって本質的に必要なものである。だから、それ以上の効用は必要ない。しかし、それでもなお、あらゆる科学が他の科学だけでなく、生命にも最も深い影響を与えるということに変わりはなく、このことは、ユダヤ学においても容易に実証されることであろう[25]。

ユダヤ学の学際的探究の基本方針をヴォルフが端的にまとめている。「ユダイズムをその環境に即して理解する」という基本方針はラビが長い間、タルムード[26]の解釈の際の基本的姿勢として守ってきた

ことである。常に「個々の事案を全体に体系づけて研究する姿勢」、「先入観を持たず」「最終的な結果にはこだわらない」という文言には、当時のドイツの実証主義歴史学との対比として捉えることもできる。学問における真理探究への真摯な態度が浮き彫りになる。政治的目論見のプロパガンダに学問を使用することを否定しているように思われる。

このようなヴォルフの学問への姿勢は、先に紹介したデュルケームの「ある一定の精神的態度」に一致する内容である。まず最も重視されるのが、「真理に反しない」ことである。タルムード編纂の時代（聖書の「律法」解釈の学問が体系化した時代）から現在に至るまでユダイズムが律法解釈をする際に、父祖伝来の「精神的態度」を受け継ぎ、私利私欲に満ちた誤った解釈が起こらないように規定してきた。ヴォルフの述べている「対象を余計な目的や特定の目論見のためではなく、それ自身のために扱う。先入観を持たずに扱い最終的な結果にはこだわらない。その目的は、一般的な意見に対して対象を有利にしたり不利にしたりすることではなく、対象をありのままに見せることである」という見解も、長い間継承されてきたユダイズムの研究姿勢に一致する。つまりユダイズムの特徴である。

更に、ヴォルフは、ユダヤ学が行うべき研究手法として以下の２点を挙げている。

あらゆる科学がその対象の本質的な相違によって幾つかの部分に分けられるように、我々の科学もまたそうであろう。しかし、前述の対象の二重分割に従って、最初は大きく二つに分かれることになる。

Ⅰ．ユダイズムの学問を歴史的、文学的に研究すること。

Ⅱ．世界各国の現存ユダヤ人との関係におけるユダイズムの学問の統計的研究。

しかし、それでも、ユダイズムは、まず、歴史的に、時間をかけて徐々に発展し、形づくられたものとして、次に、哲学的に、その内的な性質と概念に従って、示されなければならない。この二つの提示方法は、ユダヤ教文献の文献学的な理解によって先行される必要がある。その結果、私たちは次のような結論に達する。１）ユダイズムの文献学、２）ユダイズムの歴史、そして３）ユダイズムの哲学。

ヴォルフは、統計的研究の重要性を挙げているが、それよりもまず、文献学による先行研究の精密な洗い出しと歴史と哲学研究が必要であると述べている。ただし、文献学と言っても、文字資料のみによる分析ではない。ユダイズム特有の文献学がある。その内容については、市川裕の『ユダヤ的叡智の系譜：タルムード文化論序説』を参照してほしい。いくつか紹介するとすれば、「学問の理念」としてユダヤ教徒の律法の書として知られるトーラーを「トーラーそれ自身のために」学ぶこと[27]がラビの学習態度として規定されていることである。ヴォルフの前頁の引用文と重なる規定である。また、「タルムードの方法学」として市川は次のように述べている。

ミシュナ[28]の編集に際して、反対意見のない掟に関しては、特定のラビの名を付すことなく匿名としての掟として提示されるが、対立する意見が伝承されているときは、一定の規則の下でその両方を保存する方針が採用された点である。（中略）反対意見はそれを主張するラビの名とともに保存した。こうしたミシュナの編纂方針の背景として、既に賢者の間で行われたトーラーの学問においては、見

解の相違が肯定され論争が奨励されたという事実があったことが重要である[29]。

文献学においては、議論が奨励された事実が重要な意味を持つという。そして一定の原理原則を通過した「異なる意見」はラビの名とともに保存され、後世のラビの研究を助ける重要な資料となる。論争が重視されたことには、神の啓示としての神の意志は単純に一つに定まるとは考えられていないことが画期的であると市川は述べている[30]。法として定めるべき人間らしい行為の規定（宗教的には神の求める人間像）には絶えず議論が必要であり、社会がその構成員によって造られる以上、構成員の教育が必要不可欠となることも確かである。ユダヤ教が民族離散の歴史をたどったにもかかわらず、維持・発展してきた背景には、ユダイズムの学問が生活の哲学としてコミュニティーの人々を強く引き付ける機能を有していたからであろう。

３．ユダイズムの歴史研究の手法

ユダイズムの歴史研究の手法については、西洋キリスト教世界の「歴史」認識とは異なる特有のものがある。ユダイズムにおいては、歴史は「記憶」だからである。羽村貴史は次のように述べる。

> 記憶と歴史記述は、ともに過去にかかわる点で共通するが、過去とのかかわり方において根源的に異なる。歴史記述は、過去から未来へとつづく直線的な時間性を前提に、歴史上で起こった出来事を記録し保存する。一方、記憶の行為においては、直線的な時間性にとらわれず、過去とともに生きる社会の内部で、つねに同時間的＝現在的に過去が経験される。歴史学が、すでに失われてしまったものを、何か違ったものとして復元し表象＝再現することで、知識として固定化してしまうのに対し、記憶においては、過去との連続性が保たれた生活や儀礼を通じて、現在の人々が過去の出来事を内面化するため、過去が歴史化されないのである。
>
> 古代ギリシア人が「歴史」を発展させたのに対し、ユダヤ人には太古からつねに「記憶」が要請されてきた。異文化の典型例とも言えるヘブライズムとヘレニズムの文化的な差異は、記憶と歴史の違いにもあらわれているのである[31]。

つまり、歴史書としても扱われる「モーセ五書」（成文トーラー）は、ユダイズムにとっては生活の手引書であったために、子どもにとっては暗唱し議論し質問する教材であり、ラビにとっては父祖伝来の口伝とともに記憶し、常にその解釈を議論してコミュニティーに示す生活実践の手引き書であったわけである。ここにユダイズムの「経験科学性」が現れている。社会的事実には歴史的に醸成されてきた社会的要因があることには異論がないと思う。ユダイズムの場合は、歴史的要因そのものが記憶され、受け継がれ、それは知識と言うよりも自らの足元に繋がる体験として受け継がれる。デュルケーム社会学がコントの「実証主義的形而上学」と明確に異なるのは、歴史の復元手法に、ユダイズムで鍛えられた記憶による「経験科学性（実証性）」が内在するからである。換言すれば、歴史を知識として自らの学説に援用するのではなく、経験者の記憶として現在の行為者に継承させるのである。それ故にデュルケームにとって道徳的行為を体験させるための教育が重要な意味を持つことになる。

羽村は、ユダヤ人は、「われわれが一般的に想起するような歴史記述の伝統を、ごく最近まで有していなかった」と述べ、「ユダヤ人にとっての歴史は、客観的な事実でも知識でもなく、そのつど経験され、解釈され、伝達されてゆくべきものであった」[32]と述べている。ユダヤの歴史記述が始まったのは18世紀末である[33]とも述べている。羽村は、ユダヤ人の解放が叫ばれるようになると、同化と世俗化が急速に進み、ユダヤ社会がハラハー[34]を忘れ去ってしまう危機にぶつかる。そのときにユダヤの歴史記述は始まったとするのである[35]。筆者の見解では、18世紀末まで歴史記述を持たなかったことは歴史学の遅れを意味するわけではなく、歴史を可塑的な素材として偽りの事実を示すことを行わない、行えないという、歴史叙述への制約に関わる問題であると考える。ここにデュルケームをはじめとするラビ独自の歴史観の特徴が見られるのではないだろうか。

おわりに

本稿冒頭で田辺が取りあげている重要な社会理論者の一人ビュフォン（Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon, 1707-1788）は、母乳哺育を擁護する論文を著していたという。杉山大幹によれば、ビュフォンは子どもの栄養摂取をめぐる問題に大きな関心を示し、18世紀のフランスで隆盛を極めていた乳母利用の問題点についても実証的な論考を残していたという。「乳母によって育てられた子ども、とりわけ農村部に送られた子供の死亡率は極めて高く、（中略）こうした背景のもと、乳母の利用を非難し、反対に、産んだ子供に自ら授乳する母親を礼賛する趣旨の論考がたびたび公にされ、支持される」[36]ことになっていた。しかし、この論考の多くは実証的論拠の少ないものが多かった。例えば、乳母からの授乳によって、乳児に「乳母の体質だけでなく精神的特質までもが転移する」[37]という学説がまことしやかに論じられていた。しかも、このような論考が、「宗教的・古典的権威への参照によって裏付けられていた」[38]と杉山は述べている。宗教的権威による裏付けは読者に乳母利用の躊躇を促す一定の効果があったと言われる。宗教的権威とはおそらくカトリック教会のことであろう。教会権力が優勢なこの時代に、ビュフォンは、「乳母の体質だけでなく精神的特質までもが転移する」という論拠のない学説を援用することはせず、成分分析と消化の観点から、当時の人工栄養[39]の危険性と母親の母乳哺育の必要性を実証的に論じていたという[40]。

18世紀のビュフォンの論考は、実証科学の起点として重要な位置にあると考えられる。杉山によれば、「ビュフォンは、従来の類書とは一線を画す方法に基づいて『自然誌』を書き上げた。従来の自然誌は、ビュフォンによれば、観察や実験により得られた知見も伝説や逸話のたぐいも同一平面上に並べられた、混沌とした過剰な記述の集積でしかなかった」[41]という。ビュフォンの『自然誌』は正に実証科学の宗教的権威（カトリック教会）から離脱を始める知識人の様子が18世紀を通して徐々に進められていたことを示している。

フランス革命による古典的権威からの離脱、ユダヤ教徒解放政策によるユダヤ系出自者の重要スポットへの動員、普仏戦争の敗北によるフランスの科学の遅れの明確化、第三共和政による政教分離政策、、、など、実証科学としての社会学が形而上学的裏付けを根拠にした哲学から分離できた背景には、このようなフランス社会の大変動がある意味で必要であった。デュルケームがフランス社会学の祖としてその名を学問史上に残したことは、このような時代性が関与していたことも確かである。

デュルケーム社会学の「経験科学性」とユダイズムとの関係を述べてきた。この「経験科学性」は、教育によって機能することになる。デュルケーム社会学が、「教育の科学」という大学の講座名をもって開かれたことは「実証的経験科学」としての社会学の創設という意味があったと考えられる。

＊邦訳に関しては、邦訳書のある文献については参照し、適宜改訳した。（　）内は初版年。

1　田辺寿利、1965、『フランス社会学成立史』有隣堂出版、1-2頁。

2　同書、目次参照。

3　同書、2頁。

4　Durkheim, Émile, 1971(1928), *le socialism: sa definition, ses débuts, la doctrine saint-simonienne*, édité par M. Mauss, PUF, p.124.（=森博訳、1977、『社会主義およびサン－シモン』恒星社厚生閣、120頁）。

5　*ibid*., p.119（= 114頁）。

6　フォイエルバッハ、船山信一訳、1986、『唯心論と唯物論』岩波書店、155-156頁。原著は、Feuerbach,Ludwig, 1866, *Über Spiritualismus und Materialismus, besonders in Beziehung auf die Willensfreiheit.*

7　同書、156頁。「プラトンは心の非物質性を論証した最初の人であるが、しかし彼はまた心の不死を論証した最初の人なのである」とフォイエルバッハは述べている。

8　市川裕、2015、『図説　ユダヤ教の歴史』河出書房新社、9-11頁参照。市川裕、2004、『ユダヤ教の精神構造』東京大学出版会、12-16頁も参照した。この部分については筆者は次の著書でも市川の説を取り上げている。平田文子、2022、『デュルケーム世俗道徳論の中のユダヤ教：ユダヤの伝統とライシテの狭間で』ひつじ書房、36-37頁。

9　稲村秀一、2004、「ブーバーの哲学観」、平岩善司・山本誠作編『ブーバーを学ぶ人のために』世界思想社、133-152頁、149頁参照。

10　菊谷の出典記載をそのまま引用している。(Durkheim,1937,ix)とは、1937 (1895). *Les règres de la méthode sociologique,* PUF.

11　菊谷和宏、1994、「デュルケームにおける社会学の経験科学性と社会統合：その社会学的認識の深化を追いながら」『年報社会学論集』7、関東社会学会、213-224頁、cf.213頁。ここで菊谷は、「デュルケームが、社会学を学問として確立するためにその経験科学性（実証性）の確保に大きな努力を払ったこと」を述べている。また、菊谷は「経験科学性（実証性）」の部分に脚注を付して次のような説明を行っている。「デュルケーム自身は、「経験斜学」との用語は使用せず、むしろ「実証主義（positivisme）」との表現を用いる。本論文において、このデュルケームの用語法を採用しなかったのは、現代的な用語法においてはデュルケームの言う内容は「経験科学性」と表現されるものであると同時に、「実証主義」ないし「実証性」の語を用いることによって、現代哲学の用語法における哲学的実証主義と混同されることを避けるためである」菊谷、同論文脚注（1）。

12　ニューヨークのユダヤ人家庭に生まれ、『カバラー心理学―ユダヤ教神秘主義入門』という著書もある。エドワード・ホフマンがマイモニデスにPositive Psychologyの先駆形態を見出したことについては、東京大学名誉教授でタルムード学者の市川裕にご教示いただいた。

13　William C. Compton, Edward Hoffman, 2019, *Positive Psychology: The Science of Happiness and Flourishing,* SAGE Publications, cf. About The Authors.

14　Durkheim, Émile, 2007(1895), *Les règres de la méthode sociologique,* PUF, p.Ⅶ.（＝菊谷和宏訳、2018、『社会学的方法の規準』講談社、21-22頁）。菊谷はここでは「実証主義」と訳している。

15　『社会学的方法の規準』のこと。次の引用文の『規準』も同様。

16　菊谷、1994：215頁。

17　同論文、215頁。（　）内も菊谷の原著のまま。

18　菊谷、1994：216頁。

19　有名なものの例を挙げるならば、1848年にアルザスで起きた反ユダヤ暴動、普仏戦争の時に起きたヴォージュ県ルミルモンでの反ユダヤ暴動、1894年に起きたドレフュス事件などがある。

20　Durkheim, 2007(1895), : p.Ⅺ.（＝宮島喬訳、1997、『社会学的方法の規準』岩波書店、24頁。菊谷訳、2018：26頁、「ある種の精神的態度」と菊谷は邦訳している）。

21　デュルケームの「精神的態度」については次を参照。平田、2022：17-18頁、第5章。

22　Durkheim, Émile, 1970（1898）, « L' individualisme et les intellectuels », *La science sociale et l' action,* PUF, pp.263–279.（＝佐々木交賢・中嶋明勲訳、1988、「個人主義と知識人」、『社会科学と行動』恒星社厚生閣、207–220 頁。）

23　菊谷、1994：219頁。

24　19世紀初頭にベルリン大学で学ぶユダヤ教徒の学生たちが、自分たちの過去の歴史を自分たちで明らかにしようと学究的な集会を開くようになった。これがユダヤ学の始まりであると手島勲矢は述べている。手島勲矢、2009、『ユダヤの聖書解釈：スピノザと歴史批判の転回』岩波書店、99頁。

25　Wolf, Immanuel,1823, “Ueber den Begriff einer Wissenschaft des Judenthums” , *Zeitschrift fur die Wissenschaft des Judenthums Heft* 1, pp.16–20.　次の英語訳を参照した。Translation by Dunlap, Thomas, Wolf, Immanuel, “On the Concept of a Science of Judaism” (1823), published in German History Intersections, https://germanhistory-intersections.org/en/knowledge-and-education/ghis:document-27, (2022年11月27日最終確認)。

26　ヘブライ語で「(トーラーの) 学習」を意味し、ラビ・ユダヤ教の聖典を成す書物のこと。タルムードはミシュナと、それについての賢者たちの議論（グマラ）から成る。タルムードはパレスチナとバビロニアでそれぞれ議論が集成され、その編集後も数多くの註釈者たちが解釈を付加していった。市川裕、2009、『宗教の世界史７　ユダヤ教の歴史』山川出版社、付録「用語解説」5頁。

27　市川裕、2022、『ユダヤ的叡智の系譜：タルムード文化論序説』東京大学出版会、21頁。

28　ミシュナとは、西暦200年頃、ラビ・ユダ・ハナスィによって編纂された法集成で、これをもってラビ・ユダヤ教体制の基盤が確立された。文字に書かれた神の啓示は成文トーラーと口頭で伝承された啓示である口伝トーラーがあり、成文トーラーは「モーセ五書」のことであり、ミシュナは法規範に関する口伝の啓示法である。市川同書、12-13頁を参照した。

29　同書、23頁。

30　同書、23頁。

31　羽村貴史、2008、「ラビたちの記憶」、『小樽商科大学人文研究』115、211-227頁、cf.211頁。

32　同論文、213頁。

33　同論文、213-214頁。

34　ヘブライ語で「行く、歩む」を意味する動詞に由来し、そこから派生して象徴的に、人が歩むべき法もしくは規則、すなわちユダヤ啓示法の体系の総称という意味を持つ。市村前掲書、2009：付録「用語解説」6頁。

35　羽村、2008：214頁。

36　杉山大幹、2022、「母乳哺育を擁護する論理：18世紀フランスの自然誌学者ビュフォンの場合」『フランス教育学会紀要』34、59-71頁、cf.60頁、63頁。

37　同論文、63頁。

38　同論文、64頁。

39　人工栄養とは、小麦を牛乳で煮てつくる小麦粥 (bouilli) や、パンに牛乳や卵を加えてつくるパン粥 (panade) である。不衛生な調理環境も相まって嘔吐や下痢を引き起こすことが多く、子どもを死の危険に晒しているとしばしば非難された。同論文、61頁。

40　同論文、64頁。

41　同論文、65頁。